

伝統工芸の名匠



「雨月」野口園生作



「知秋」市橋とし子作



「日々安穩」野口園生作



「無想」市橋とし子作



記録映画

にんぎょ

カラー 34分

16% 価格 ¥210,000
ビデオ 価格 ¥ 50,000

監修 北村哲郎 (共立大学教授)

協力

野口園生 [衣裳人形] (重要無形文化財保持者)
市橋とし子 [桐塑人形] (重要無形文化財保持者)

文化庁
東京国立博物館
国立文楽劇場
東京都埋蔵文化財センター
山梨 釈迦堂遺跡博物館
和歌山 淡島神社

青森 弘前
埼玉 岩槻
京都

恐久 渡 山 寺
笛 畝 人形 記念美術館
人形 歴史 館 寺
宝 鏡

石川 潤平
小椋 久太郎
桐竹 一暢
大藤 晶子
音 羽 菊 邦七

神成 澤
上林 アイ子
後藤 静夫
田中 秀代
宮本 又左衛門
渡部 直哉



—製作意図—

日本ではかなり古い時代から、自然の災厄や原因の不明な病気などを、人形に託して自分たちの身代わりをしたり、あるいは神を招来する霊の「依り代」にしたり、時には憎むべき相手の呪詛のための対象物などとしてきました。この映画は、『日本人にとって人形とは何か』を考えるために、遠く縄文時代の土偶に始まり、やがて近世に至り江戸時代の爛熟した文化から生まれた様々な人形を通して、人形が日本人の精神文化における『心のイレモノ』でもあったことを探るとともに時代と人形の変遷にも注目したいと思います。

—解 説—

土で焼いた器を發明した時代から人間の暮らしは一変します。そして、土器と一緒に何気なく作った土のひのがたを火にくべました。モノを入れる入れ物と、身体やここにまつわるもろもろの不安や災いを移すことのできるころの入れ物。そのころの入れ物のさまざまをこれから見てみましょう。

寝ている間に子供のたましいが飛び去らないようにと、親たちが作った天児（あまがつ）や這子（ほうこ）と呼ばれる人形、女の子の成長を祝う雛祭り、京の都で生まれた御所人形。これら人形を生み出す職人は正にたましいを扱っていたのです。人形の産地、岩槻市に住む石川潤平さんもその一人です。その職人芸が花開く江戸時代。

人形を動かしたいという欲求も生まれます。首を振る童子や文楽人形。動かすだけでなく、命を、たましいを……………。

京都で育まれた文明とともに、人形も日本全国に行き渡ります。人形は遠い都の情報でもあったのです。一方、700年ほど前から皇族の姫君が代々出家入山されている尼寺、京都の宝鏡寺には、幼い姫君が肌身離さなかった人形が今も残っています。人形の住む人形寺。

市橋とし子さん（1907年～）は古い因習の中で苦勞されながら、新しい女性像を人形に託します。素足の、しっかりと前を見る女性たち。「知秋」「草の上」「風薫る」「無想」そして「愛」。

野口園生さん（1907年～）は江戸時代の香りをいまなお見続けています。「はつなり」「雨月」「師走」そして「日々安穩」とその世界にするりと滑り込んでまいります。

小椋久太郎さんは、もう80年近くこけしを作り続けています。お椀や木の鉢を作っていた木地職人が明治に入ってから作り出した新しい郷土人形、木そのもののこけし。

こうした人形は人のひながたの形した神、たましいの入れ物、人間の素晴らしい発明品なのです。

—記録映画「にんぎょう」をみて—

映画「にんぎょう」は魅力的な作品である。縄文時代からの人形の歴史を簡明に紹介しつつ、人形の表情、人形のおかれた環境、そして人形の誕生と死までが、リアルに描かれている。その中でも、日本人形と女性文化とのかかわりをデリケートなタッチで良く伝えているところが素晴らしい。見終わってみると、人形と同じような優しい心情を持って、この映画がいつしか私たちの心にすっと入りこんでいることがわかるからである。

映画評論家 渡部 実

製作 宮下英一
脚本演出 松川八洲雄
撮影 小林治
照明 前田基男

音楽 間宮芳生
撮影助手 長井和久
彦坂宣明
演出助手 日向寺太郎

解説 花形恵子
ネガ整理 川岸喜美枝
録音 東京テレビセンター
現像 IMAGICA

記録映画・展示映像・PR映画・教育映画・企画製作



株式会社

英映画社

〒104 東京都中央区八重洲2-6-13 幸田ビル 電話 東京 (3281)3414. FAX (3281)4680